

青年期における自己対象体験と自己愛及びアイデンティティの関連

別府大学大学院 文学研究科 臨床心理学専攻

M1614003 塩田智博

本研究では、青年期において自己対象体験と呼ばれる対象との関係が、自己愛とアイデンティティの確立に与える影響について検討することを目的とした。

研究1では青年期の友人関係における自己対象体験を測定する尺度の作成を目的とした。作成する尺度の項目は小林(2005)と小林(2006)を参考にした。分析の結果、先行研究と同様に「鏡映自己対象体験」「双子自己対象体験」「理想化自己対象体験」の3因子が得られた。

研究2では自己愛を誇大性と過敏性で分類し、自己対象体験とアイデンティティの確立の差を明らかにすることを目的とした。調査内容は、研究1で作成した「青年期の友人関係における自己対象体験尺度」「ナルシズム尺度(高橋,1998)」「多次元自我同一性尺度(谷,2001)」を使用した。自己愛の形態により分類するためクラスター分析を行った。その結果、誇大傾向群、過敏傾向群、自己愛両低群の3群に分類された。次に、分類した3群における自己対象体験尺度の得点を比較した。その結果、自己愛的な特性を示さない自己愛両低群は「鏡映自己対象体験」と「双子自己対象体験」を他の群よりも多く経験していることが明らかになり、友人からの肯定的な支援を体験していることが明らかになった。一方、過敏傾向群は「理想化自己対象体験」が他の群よりも多く経験していることが明らかになり、友人と自分を比較している側面が示された。最後に、分類した3群と多次元自我同一性尺度の得点を比較した。その結果、自己愛的な特性を示さない自己愛両低群が最も得点が高いことが示され、他の群よりもアイデンティティの確立がなされていることが明らかになった。

研究3では、研究2で得られた3群において自己対象体験が自己愛、アイデンティティに与える影響について分析した。その結果、誇大傾向群においては自己愛の因子に対して、「鏡映自己対象体験」が正の影響を、「理想化自己対象体験」が負の影響を与えることが明らかになった。また、過敏傾向群と自己愛両低群では自己対象体験は自己愛に影響を与えないことが明らかになった。

全体を通して、自己愛の様相の違いによって、青年期における友人関係が自己対象体験として影響を与えることに違いが見られた。これまでの先行研究では、青年期における友人関係は重要な要素として指摘されてきた。しかし、過敏傾向の自己愛を示す青年においては、友人関係は自己愛を支持する役割を担わないことが明らかになり、信頼できる大人との関係が重要なサポート源になると考えられる。また、誇大傾向の自己愛を示す青年では、理想化された他者、つまり、尊敬できる他者との関係を通じて、肥大化した自己愛が抑制されることが示唆された。